

令和4年水田の作付面積 主食用米は130万ha割れ

～転作増えるも水田利用の耕作面積は減少

農水省は令和4年度の全国における水田作付面積を公表した。注目の主食用米の作付面積は5.2万ha減の125万1,000haとなった。実に福島県の作付面積(5万1,900ha)と同程度の水田耕作面積が1年間で消失してしまった事になる。12月9日付け公表の作況指数は全国で100、10a当たりの平均反収が536kgなので前年よりも30万6,000トンが減少となる。一方で主食用米より転作された加工用米、飼料用米、WCS、麦、大豆等の戦略作物は3.7万haの作付けが増加した(図)。ただし、戦略作物の増加面積分と主食用米の減少した作付面積がプラスマイナスゼロであれば国内における食糧安定供給においては問題とならないのだが、残念ながら差引き約1.5

令和3・4年産作付比(9月15日付) 水田における作付状況 単位:主食用を除く項目の面積単位はha

	主食用米(万ha)	加工用米	備蓄米	新規需要米				
				飼料用米	WCS	米粉用	輸出用等	その他
令和4年	125.1	49,786	36,479	142,055	48,404	8,403	7,248	92
令和3年	130.3	47,641	36,435	115,744	44,248	7,632	6,748	124
増減	-5.2	2,145	44	26,311	4,156	771	500	-32

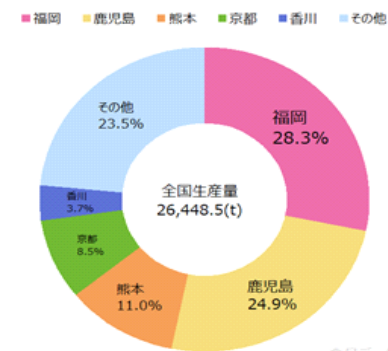
	麦	大豆	飼料作物	そば	なたね
令和4年	106,275	88,568	70,380	27,898	679
令和3年	101,760	85,484	72,917	28,210	752
増減	4,515	3,084	-2,537	-312	-73

万ha分も水田の耕作面積が減少してしまった数値となっている。この数字は静岡県の主食用米の作付面積とほぼ同程度の耕作面積が消失した数字に相当する。日本における人口減少と高齢化、食の多様化により1人当たりの1年間における米の消費量は50.2kg(令和2年度統計)と年々減少している。全国の作況指数より算出された米の生産高は670万1,000トン。主食用米の消費量は総人口1億2,232万人(総務省令和4年5月統計)×上述した米の消費量を掛け合わせると約614万トンと算出できる。備蓄米をどれくらい確保しておいた方が安心かという議論は別として、主食用米はまだ生産超過の状況であるが故に更なる主食用米の生産調整が必要となろう。昨年の米価は再生産割れの価格と言われている。農家の立場からすれば少しでも収量を上げて収入を増やしたいところではあったのだが、本年産の米の作柄を見ると北海道を除いた地域の生産者にとってみれば決して満足できるものではなかっただろう。3年ぶりに米価が平均9%上がったが、全ての生産資材費はそれを上回って上昇している。肥料は高騰対策事業が発動されたものの、年明けに農薬等も値上がりが予定されておりこれでは米作が事業として成立できず、ついに廃業を選択する農家が雪崩を打つように発生するのではないかと危惧する。この中で高齢者や第2種兼業農家ではなく特にこれからの担い手世代や専業農家が廃業を決断するに至る数が多いともなれば話は深刻だ。大半の農家は残念な事に生産した農産物を希望する価格を付けて販売出来ていない。米ならば全農、その他の農産物は大手量販スーパー等のプライスリーダー達が生産物の相場を動かしており、生産コストでなく需給バランスで価格が決まっているのが現状となっている。生産しても相場次第で赤字商売や圃場廃棄とするそんなムダな食料生産は少なくとも資源に乏しい日本がすべきことではないはずだ。今回、主食用から転作した作物は飼料用米にシフトした事象が多く、米価が何かの転機で上昇基調となると直ぐにでも主食用米生産に戻す事を考える生産者がまだ潜在的に多いのではないだろうか。水稻のような土地利用型農業の場合、一度耕作を中止、ないしは畑作に転換した圃場はそう簡単に水田に現状復帰出来るものではない。特に大豆や小麦、飼料作物の代表であるとうもろこしなど、海外依存率の高い農産物は今回のロシアによるウクライナ侵攻のように世界の食糧生産を担う地域で戦争が起きた場合、めぐりめぐって日本国民の食糧安全保障を脅かす状況となる。海外依存リスクの低減を図るべく国内での生産拡大もっと促すようなメリハリを付けた大胆な政策が必要ではないだろうか。そう考えると耕作面積減の発表が毎年なされる度にこのままで日本は良いのだろうか!と、この年の瀬に憂う気持ちになってしまったのは筆者だけだろうか。

タケノコと竹のおはなし

一般的にタケノコと言えば春3～5月頃をイメージしますが、九州地区の「早掘りタケノコ」は秋から冬にかけて出荷が始まります。「早掘りタケノコ」はまだ地表に芽を出していないタケノコを掘り出して収穫するもので、気候が温暖な鹿児島県出水市は国内でも最も早く10月中旬から収穫が始まります。一般的に広く知られているタケノコの代表品種は孟宗竹（モウソウチク）で、原産国である中国からの渡来竹です。福岡県には1600年代前半に現在の八女市に移植されたことが最初と言われており、今でも八女市は全国トップクラスの出荷量を誇る産地です。生産量もその八女市を抱える福岡県が全国1位、次いで鹿児島県が2位、3位は熊本県と全国生産量の60%以上が九州地区で生産されています。孟宗竹（モウソウチク）のほかに、真竹（マダケ）、淡竹（ハチク）があります。種類によって生態は異なるようですが、意外と知られてないのが一定の時期がくると花を咲かせるという事です。花が咲くまでの開花周期はなんと孟宗竹で約60年、真竹で約120年と非常に長く珍しいものとされてきました。滅多に見ることができない竹の花はイネの花によく似ており（竹はイネ科に属する植物）、孟宗竹に関しては開花後にレモンのような果実を実らせませす。

タケノコ（筍/竹の子）生産量の都道府県別シェア（2020年）



食品データ館

さて、タケノコは漢字で「筍」と書きます。竹かんむりに旬と書きますが、この名前の由来は、使われている漢字の旬は日にちの単位を示す「旬」（＝10日間のこと）からきているとのこと。そしてタケノコはわずか10日で竹になると言われていることから「筍」と書いたと言われている。10日は極端にしても、とにかく生育が早いのが竹の特徴です。皆様はこの「竹」と聞くと何を思い浮かべますか？多くの方は風光明媚な竹林、春の味覚として食するタケノコ、はたまた七夕や竹取物語などをイメージされるのではないのでしょうか。この様に「竹」は日本に暮らす人々にとってとても馴染み深い存在です。そんな竹ですが、近年は放置竹林による竹害が深刻化しており生活環境において大きな影響を及ぼしているところも多くなっているようです。放置竹林とは、もともとタケノコ栽培のためなどに植えられた竹林が管理されなくなり放置されてしまったものです。さらに竹林には森林とことなる大きな特徴があります。それは根を浅くはるということ。木は根を深くはるため雨が降っても土をしっかりと支えますが、竹の根は横に広がり深さは30cmほどしかありません。そのため大雨が降ると竹林ごと斜面から滑り落ち、大きな土砂災害をおこす危険があります。放置竹林は周辺に生育する樹木の生長を阻害します。多くの樹木は竹より背が低い為に陽光を遮られやがて枯死していくそうです。放置竹林の拡大を防止することと伐採した竹を資源として有効活用することが重要な課題となっています。鹿児島県薩摩川内市はタケノコの一産地ですが、タケノコ栽培で整地の為に伐採した竹の活用が課題となっていました。新たな利活用の方法に困り果てた住民が相談した先が地元の製紙工場でありました。相談を受けた製紙工場は、試行錯誤を重ねた結果、「竹紙」の開発に成功されました。今ではノートや折紙にと教育資材の一つとして活用されています。

さてもう少しすればお正月です。お正月になると新年の神様を招くという風習があるため玄関に門松を飾る家もありますが、これは降りてくる神様の目印になる為に置かれます。その門松にも竹が使われています。しなやかで折れにくく、空に向かって真っすぐと伸びる竹は生命力を象徴する縁起の良い植物とされており。また、竹の節を絡めて斜めに切った時にその切り口が笑顔に似ている「笑う門には福来る」という意味でも使われます。我々のご先祖様の意向によって植えられ身近に存在する竹林ですが、放置竹林として厄介者扱いし排除していくのか。日本古来の伝統、しきたり品の宝物として竹林を大切にするのか。古くからのしきたりに触れる機会が多い年末年始に考えてみては如何でしょうか。（福岡支店）

本年最終号となりました。皆様にとってどの様な一年でしたでしょうか。弊社は12/29～1/3まで休業させていただきます。どうぞ良いお年をお迎えください。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>